

水の井戸

渡辺たづ子

1

目質の悪い子と、小さい頃からよく祖母に言われた。

昔から、夏になるとアレルギー性結膜炎になった。近所の眼科で洗眼してもらい目薬を点け、たいてい二週間ほどで治るのだが、そんな時、祖母は必ずわたしを井戸へ呼んだ。それは離れの前庭にある釣瓶井戸で、周囲には注連縄が張られていた。

囲いの中にわたしを立たせると、祖母は姿勢を正して深々と頭を二回下げてから、ぼんぼんと手を大きく打ち鳴らした。それから祝詞本を開いて、よく通る声で祝詞を奏上した。それは井戸の神様に捧げるもので、その間ずっとわたしは両手を太ももに当てたまま、頭を下げていなければならなかった。祝詞が済んでから、祖母は釣瓶で水を汲み

上げて、その水を手で掬って私の目に押し当てた。井戸の神様が目に宿った穢れを祓ってくださいと、祖母は教えてくれた。

祖母からは多くのことを学んだが、目質に関しての教訓は、深く残っている。

人には二つの目がある。一つは体についていて、もう一つは心についている。かすみはこの両方の目質が悪い。体の目の穢れは井戸の神様が祓ってくださいるが、心の目の方は自分で祓わなければならない、これこそが大事なことと祖母は言うのだった。

「かすみは都合が悪くなると、見たくない見たくないって目をぎゅつと瞑ってしまう。悪い癖だよ。そうすると、いつとき楽になった気はするんだけどね、それじゃ心の目は磨かれない。きちんと開けてしっかり見る。でないと、大事なものはいつまで経っても見えてこないんだよ」

祖母の家に大きな神棚の前に並んで座る時、しばしば素晴らしい聞かされた。けれどもその頃のわたしには、祖母の言葉の意味は理解出来なかった。本当に分かったのは、それから三十年以上も後のことだ。

祖母と一緒に暮らしたのは、わたしが小学校に上がるまでの六年間だった。母屋に両親とわたしの三人が住み、祖母は遠縁にあたるヨシさんという中年女性と、別棟の離れで寝起きしていた。銀行員だった父の転勤をきっかけにその家を離れたのだが、父は定年になっても生家へ戻らずに、退職金で同じ町内に家を建てて住んでいる。

父は実の母親である祖母を避けていた。それは、祖母が神がかりをする人だからだ。祖母が神ごとをするようになったのは、四十代の半ば頃からという。それをわたしは祖母本人から、こんなふう聞いていた。

2

物心ついた頃から、祖母は普通の人に見えないものをしてしばしば見ていた。真夏の太陽が照りつけている昼下がりに、ずぶ濡れで震えている子供に助けを求められたり、凍えるような真冬の朝に、裸同然の姿で陽気に駆けていく人とすれ違ったりと、毎日ただ通り過ぎていく道だけでも、どれ

ほど奇妙な光景と出会ったことか。

その頃は、自分も他人もおんなじと思っていたから、変わったことがあるたび、周囲の人に話していた。そのため祖母は友達から、ほら吹き、嘘つき、と呼ばれるようになった。どうも変だ、自分は他の人とはちよつと違うかもしれないと、心の隅では分かっている、それを認めたくなかった。自分が人と違うというのは、心細くて怖いことだった。

やがて祖母は、喋らない事が自分を守る唯一の手段だと知った。つけられたあだ名は悔しくて切なかつたが、孤独よりもましだった。聞かれたことだけに答えて、ただニコニコしながら人の後をついていけば、みんなと一緒にいられた。だから祖母はとても無口になった。

七つか八つの頃だった。近所の神社に子供相撲用の土俵があつて、子供たちは毎日のようにそこで相撲をとっていた。その中には兄たちもいたから、祖母はよく人の後ろから覗いていた。そんな時、必ず見かける男の人がいた。それは小学生の兄とあまり背丈が変わらない、小柄で小太りなおじさんだった。いつも土俵から少し離れた太い杉の木の下で、手を叩いたり声を立てて笑ったりしている、陽気な人だった。

ある日、友達と神社でかくれんぼをしていた祖母は、隠

れ場所を求めて、これまで行ったことのない裏手の奥に入
つてみた。静かすぎて一人では怖かったが、なぜか足が進
んでしまう。やがて、少し先で落ち葉がこんもりと山にな
っている場所を見つけた。その陰に隠れようかと近づいて
みると、何とそこにはお地藏様が埋まっていて、枯葉の間
からちよこんと顔を覗かせてた。

お地藏さん息苦しかろうと落ち葉を取り除いているうち
に、祖母は気づいた。そのお顔は、いつも相撲を見ていた
あのおじさんだった。坊主にした丸い頭の形やら、ほんの
り笑っている目元、口元が瓜二つだった。枯葉を全部払つ
てみると、それは両手を合わせて微笑んでいる五十センチ
程の小さな石仏だった。あのおじさんはお地藏さんだった
のかなと思つた時、その目が祖母を見てにつこりと微笑ん
だ。

祖母が変わつたのはその時だった。

自分にはこういうものが見えるんだ、それは他の者には
見えないものなんだ。

言葉にしてみればただそれだけのことだったが、子供心
にすんと胸に落ちた。自分を理解し、自分を受け入れる
ことが出来たのだ。誰からも相手にされないダメな自
分と、何をするにもいちいち人の顔をうかがったり、お
どおどしていたけれど、この時を境に、祖母は普通に息が

でき、普通に喋って笑えるようになった。

だからといって、しかし、祖母の孤独に変わりはなかつ
た。大勢の武士が、刀や槍を持って必死の形相で斬りあつ
たりの血なまぐさい場面に出くわした日などは、その恐ろ
しさに、布団をかぶって一人で泣いた。中でも特に祖母を
辛くさせたのは、火の玉だった。

それは普通に道を歩いている時、ふいに現れた。人家の
屋根の上から飛び出して遠くの山に消えていく、真つ赤な
光だった。最初は訳もわからずに、ああ綺麗だなと、ただ
それだけだったのが、やがて、それを見た数日後には、そ
の家から死人が出ると分かった。年寄りもいない、病人もい
ない家から赤い火の玉が飛び出して、それが仲のいい友達
の家だったりした日は、祖母の心は不安で押しつぶされそ
うになった。人の寿命など知りたくない、何も見たくない
と、俯いて歩く癖がついた。

大人になるにつれ、祖母は少しずつ受け流すことを身に
つけていった。それと共に心が落ち着いていき、不可視の
世界との接触が年々少なくなつていった。やがて、結婚し
て子供を産んで育ててと忙しくなると、見えない世界との
関わりは完全になくなつた。祖父と一緒に朝から暗くなる
まで畑に出て、合間に子供を育てていたから、普通に見え
るものまで見えていないような、忙しい日々だった。それ

は祖母にとつては初めて訪れた、人並みの幸せだった。

しかし平安な時は短かった。長男である父が学校を出た頃から、祖母は時おり激しい頭痛に襲われるようになった。文字通り頭が割れるほどの痛みで、尋常ではなかった。少しの熱や怪我などは押して畑に出ていた祖母だったが、その頭痛には勝てなかつた。寝返りを打つただけでくらくら目が回つて、強い吐き気に襲われた。それがはじまると何にもできず、ただ静かに横になつていくしかなかつた。

初めのうちは月に一、二度ほどだった。あちこちの医者へ行つてみたが、ただの頭痛と診断され、痛み止めの薬が処方されるだけだった。どれほど強い薬を飲んでも、しかし、頭痛の発作は収まらなかつた。気のせいだ、脳病院に行けと怒る医師もいた。そんなさなかに、祖父が急死した。脳溢血だった。それから、亭主を亡くした後の気の病と言われるようになった。

頭痛の回数が、週に一度の間隔になつた頃からだった。横になつて目をつむつてみると、ドーンドーンと打ち上げ花火のような音が聞こえた。それと共に、どこかで見たことのあるような集落が爆発炎上してして、ばらばらと崩れていく光景が目の前に現れた。真っ赤に燃え上がった町の中で、焼け焦げた人が大勢重なり合つて倒れている。かと思つと、空いっぱい真っ赤な火の玉が現れて、その中か

ら、黒焦げになつた人がばらばらと落ちてくる。

発作のたび、こんなふうになり、この世の終わりのような光景ばかりが現れるようになった。布団を被つても目をつむつても、消えないのだ。とうとう頭がおかしくなつたかと、祖母は初めて自ら望んで脳病院に行った。そして長い病名をつけられて、白い薬をもらつてきた。それを飲んでも、事態は好転しなかつた。

そんな危うい日々をくぐり抜け、祖父の三年忌もどうか無事に済ませた年だった。

夜、いつもの時間に寢床へ入つて電気を消して目を閉じると、急に目の裏が明るくなつた。見ると、枕元に白い着物を着た若い女性が、正座している。長い黒髪を後ろで一つに束ねた、巫女さんのような整つた顔立ちの人だった。膝の上に置いた両手の間に眩しく光るものがある。その光で部屋の中が昼のように明るくなつていた。

驚いて祖母が起き上がると、その人は、微笑んで両手を差し上げた。それは光る玉だった。その手がまっすぐに伸びてきたとき、なぜか祖母は、ああやっぱりこれを受ける事になつたかと思つたのだ。だから何のためらいもなく、それを自分のものとして受け取つた。

受け取ると同時に、光る玉は祖母のちょうど鳩尾あたりに吸い込まれるように入つていった。日なたのぬるま湯み

たいな感覚が体内でじわーっと広がって、体全体に軽い
びれが広がった。ああ気持ちいいなあと思っていると、や
がて体の真ん中がひよいと吊り上げられて、体全体が浮き
上がる感じになった。自分があやつり人形にでもなつて糸
でふわっと持ち上げられる、そんな感覚だった。

突然、軽くなつた体の、頭のとつぺんから足の先にまで、
玉の白い光がすとんと落ちるように貫いた。体の内部が、
照らされるように明るく輝いたのが分かった。同時に、祖
母は何とも形容しがたい快感に包み込まれた。それを表す
言葉が見つからないのがもどかしい。生まれてこの方、こ
んなに嬉しくこんなに幸せな気持ちになつたことはない。
ありがたい、ありがたいと、祖母は知らないうちに涙を零し
ていた。

白い着物の女性は、そんな祖母にまた微笑んで、すつと
立ち上がった。そして、綺麗な細い指で祖母の手を握つた。
「さあ行きましょう。この手を決して離さないで下さい」
どこ行くのかと問う暇もなく、次の瞬間、祖母は引き上
げられていた。上に昇っていることだけは、はつきりと分
かった。

祖母はまっくら闇にいた。繋いだ手の感触がなければ、
恐ろしく一秒といられないような、真の闇だった。振り
落とされないように相手の手を力いっぱい握り締めながら、

まっくらな中をただただ上昇し続けた。どこまで昇つたの
か、もうこれ以上は耐えられないと叫び出しそうになつた
時、ようやく目の前に白っぽい霞のようなものが現れた。

それが遠くにある明かりと分かつた時は、心底ほつとした。
霞が光の点になり、その薄明かりの中で繋いだ手が見え
て、その先の白い着物の袖が見えてと、みるみる明るさが
増してきた。夜の星明りから月明かり、夜明けの薄明かり
から朝になつて昼になる。昼の明るさが真夏の太陽くらい
になつても、まだ光は増え続け、もう目を開けているのが
恐ろしくなつて、目を閉じた。自分の体がどこにあるのか
分からない、自分はいま生きているのだろうか。そう思つ
た時、繋いでいた手が離れた。

気がつくとも足が地に着いていた。爪が白くなるほど握り
締めていたので、指がしびれていた。空間の中で失つてい
た四肢の感覚が徐々に戻ってくるのを感じながら、祖母は
目の前の光景に見とれていた。

それにしても、これはいつたい何だろう。祖母はあつけ
にとられたまま、しばらく動けなかった。

そこは光の世界だった。目の前に、幾色にも輝く光の山
があつた。光が噴水のように絶え間なく湧き出しているの
だ。見たことも聞いたことも想像すらしたことのないよう
な、動く光の固まり。数えてみると、光は虹と同じで七色

あつた。凝視していると、同じ色でも濃淡が何段階もあつたから、それこそ限らない色が重なり合い混ざり合つて光つていた。祖母はただ立ちつくし、見とれていた。

気がつくつと、光には分け目ができていた。近づいてみるとそれは階段で、まっすぐ上に続いている。

「見えましたか？」

いつの間にか隣にあの女性がいて、また祖母の手を取つた。

「今からあの階段を登ります。過去にも何人かが許されてここを登っています。あなたも許されたのですよ」

さあ、と手を引かれて、祖母は階段を一段一段登つていった。どこへ続いているのだろう。祖母はまた、今度こそ天国かと思つた。それならそれでいい、もう何があつても驚くまい。気がつくつと、階段には以前登つた人のものだろう、いくつかの足跡があつた。それは祖母を少しだけ安心させた。やがて、行き止まりになつた。目の前は真っ白な光が湧き出て、まぶしく銀色に光つていた。

女性は指差して言つた。

「ここは神界の入り口です。ここから先、人間は入ることが出来ません。あなたはこれから、この入り口に立つて神の言葉を聞き取り、人々に伝えていくことになります。あなたは神の使い人として、この現世で人々に神ありてを知

らしめると共に、神の贈り物である愛を伝えていくことになりませう」

深々と頭を下げると、女性はすつと見えなくなつた。

気がつくつと、部屋は元通り暗くなつていた。夢だと思つた。祖母はそう思おうとした。自分の頭がいよいよおかしくなつてしまつたとは思いたくもなかつた。

けれども一晩寝て起きたら、夢でも狂気でもないことはすぐに分かつた。その日から、神の言葉が聞こえるようになったのだから。

3

祖母が住んでいる離れは平屋造りで、小さな台所に風呂、トイレ、納戸、六畳の寝室と居間の他には、十畳ほどの客間があつた。客間は板張りで、天井近くに太い注連縄が張られて、その下の白布で覆われた台の上には、大きな神棚が置かれてあつた。

離れを訪れる人達は、母屋を通らずに裏口の小さなくぐり戸から入つてきた。同居しているヨシさんが、家事手伝いの他に人との取次ぎや事務全般を受け持つていた。日中は居間が待合室になつていて、順番を待つ人が常時十人ほど並んで座つていた。全てクチコミで集まつてくるこれら

の人々は、ヨシさんの案内で順番に一人ずつ神棚のある客間へ入り、神の言葉を聞いていくのだった。

そこでは迷い犬や迷い猫の相談から、金銭トラブル、健康相談、家族や親族問題、恋愛結婚相談などあらゆる問題が持ち込まれていた。加えて、ありがたい神様の言葉を聞いてみたいという信心深い人、古い感覚で来る人、あるいは単に興味本位の人もいた。相手がどんな人物であれ、祖母はそのたびに神棚に向かって手を合わせ、祖母にしか聞こえない神界からの言葉を聞き取って、淡々と相談者に伝えていた。

保育園が終わると、わたしはよく祖母のいる離れに入つて遊んでいた。相談者がいる時は客間に入ることは許されなかつたから、台所のテーブルで絵を描いたり待合室でおやつを食べたりしていたが、飽きると裏庭に出た。そこにいれば、夏などは特に、開放された客間の窓から声が漏れてくる。わたしは遊ぶ振りをして、そこから聞こえてくる声に耳を傾けた。

「裏山の麓にある土地ですが、おかげさまでやつと買い手が現れました。このまま進めてもよろしいでしょうか」

声の主は知っていた。さつき待合室にいた人だ。時々来ているけれど、ほとんど笑顔を見せたことがない、痩せて色の黒いおばさんだ。

「買い手は古くからの知り合いの方ですね」

「はいそうです、親の親の代からの知り合いの家の人です」

「その方でしたら大丈夫です。話を進めていいですよ」

祖母の声だ。けれども喋り方は全然違う。普段より少し高く、柔らかかでもとても優しい声だ。普段の祖母よりずっと若い人のように聞こえる。

「よかつた…それでようやく借金が返せます」

「商売の方は、時代の流れもあつて残念な形になりましたが、今度のことで金銭的なことは解決して、精神的にも落ち着きますから、これから先は幸せに暮らせませすよ」

「はい、やつと安心して眠れます、ありがとうございます。それから、あの、今さらなんです、親から受け継いだ土地をわたしらの都合だけで売ることを決めてしまつて、ご先祖様はどう思つてらっしゃるか、気になつて……」

「気になさることはありません。ご先祖様は領いておられますよ。あなた方の苦勞をよく見てこられたので、理解して下さつてます。白い髭を長く伸ばした方が見えますが」

「あ…それは多分、夫の祖父だと思ひます。今の商売はその祖父が始めたと聞いてます。写真では背筋がまつすぐで髭が長くて」

おばさんの声が上がつてくる。

「はい。その方が、これまでご苦労であった、土地の話は早く進めないと運気を逃がすから、早くせよとおっしゃってます」

「そうなんですか……よかったです」

「この話の良い流れは、そのご先祖様が動いて下さったおかげです。お帰りになったら仏壇に線香を一本立てて、心の中でよくお礼を言ってください」

「わかりました、そうします。本当に有難うございました」

たいていの人は、こんなふうにくつた事や迷いごとなどを訊ね、何度も礼の言葉を口にして帰っていった。

わたしは時々、祖母の寢床に入つて眠つてしまふ事があつた。そんな時でも、祖母の寢顔は見たことがなかつた。

隣で絵本を読んでもらつて、おやすみなさいと一緒に目を閉じた筈なのだが、夜中に気づくと祖母の布団は空になっている。どこに行つたのだろうと思ひながらまた眠つてしまい、朝になる。すると祖母はもう起きて、井戸の水で禊を済ませて神棚の前にいた。

「おばあちゃんはいつ寝てるの？」

不思議に思つて聞いたことがあつた。

「神様から、今日も一日ご苦労さま、と言われた時だよ」

祖母は笑いながら答えてくれた。神ごとに関する質問をすると、祖母はとても嬉しそうな顔をする。だからわたしは、祖母が疲れた顔をしている時には、努めてそんな話題を選んで祖母を見上げたものだった。

「それは何時ごろ？」

「十二時の時もあれば夜中の二時三時の時もある」

「そんなに遅くまで起きてて、何してるの？」

「神様から色んなこと教えられてるんだよ」

祖母は、望んで神の使い人になつたわけではない。それまで特に信仰心が強かつたわけでもなく、特定の宗教も持たなかつた人だ。だから最初のうち、神様からの言葉は全て、祖母を用人として教育するために降ろされたものだったという。

「どんなこと教えてもらった？」

「まずはじめに、神は何を思つて人間を創られたかを教えられたよ。かすみはどう思う？」

「全然わかんない。神様と話した事ないもん」

「そうだねえと、祖母は笑う。」

「神様は、幸せになるようにと人間を創られたんだよ。だから人は幸せにならなくちゃいけないんだ。簡単なことだよね」

「うん、かすみは幸せだよ」

「世の中の人みんなが、かすみみたいだといんだけどね」

祖母は嬉しそうに何度も頷く。

「おばあちゃん、神様と勉強してていやだと思ったことないの？」

「いっぱいあるよ」

「そういう時にはどうするの？」

「聞こえないふりして寝てしまうこともあったね、最初の頃は。とにかく眠くてしょうがなかったんだよ」

祖母は右頬の下で両手を合わせ、寝たふりをした。

「そんなことして神様は怒らないの？」

「時には厳しいこともおつしやるが、怒りはしないよ。ただ悲しそうな顔をなさる」

「いやならやめちゃえばいいじゃん」

「やめることも出来たんだよ」

と、祖母はわたしの目をじつと見て、

「でも、いやなことの百倍もいいことが多かったからね」

頷いて微笑んだ。

「たとえばどんな？」

「例えば、そうだなあ」

と、祖母はしばらく考えてから、

「神様の教えてくださる勉強の中には、体を使うものもある

ってね。例えば、南の島に住んでる人達の踊りみたいにな、全身を使って激しい動きをさせられることがあった。頭の中が真っ白になるまで、もう倒れるんじゃないかってくらい続けるんだ。でも神様は、やめてよし、とはおつしやらない。手足の感覚がなくなつて、自分のものじゃないみたいになるんだよ。何のためかは知らない、神様は説明はしてくださらないから、ただ言われた事をするだけ。で、次の日も同じ事を命じられる。だけどおばあちゃんはもう足が痛くてあんな動きは出来ないとと思う。今日は出来ませんと答えると、神様は黙つて頷いておられる。次の日もまだ痛いから出来ませんという、神様は頷かれる。そんなことが何度もあった。神様は決して無理強いなさらないのを知っていることに、出来ない理由ばかり並べ立てて怠けている時期があった。

足が痛い、忙しい、睡眠不足で頭痛がする。それは嘘じゃない、本当にそうだったんだけれど、自分にできる範囲のことはあった筈。でもおばあちゃんはそれをしなかった。言い訳して休んでいる時、ああ助かったと喜んでいたりかという、これが全然そうじゃなかった。言い訳ばかりかき並べ立てる自分が情けないと、心の奥の奥で泣いているもう一人の自分がいたんだよ。悲しくて寂しくて不安になっている心が、神様を求めている。それなのに、目先の大変

さに負けてしまつて怠けることを何度もしたよ。

そんなことを繰り返しているうちに、やつと分かつたことがある。神様と繋がること、ただそのことが、人間にとつては大きな喜びなんだ。神様はいつでもどこでも人を深い愛情で包んでくださっている。人はそれを受けさえすればいい。受け取るか受け取らないか、ただそれだけ。人の幸せはそれで決まるんだよ」

論すように言つてから、祖母は優しく微笑んだ。

「どうすれば受け取れるの？」

「ただ神様を思えばいい。昼の太陽も夜の月も、降る雨も吹く風も、全て神様からの贈り物。目に見えるもの全てが贈り物。神様なくしては何もない。もちろん人間もだよ。

それを、かすみはどう思う？」

「神様、ありがとうと思う」

「そう、そうなんだよ。全て神様のお恵みだから、ただ感謝すればいい。ありがとうという気持ちで毎日を過ごせばいい。それが受け取ることになる。かすみは賢いねえ」

「かすみは賢いから神様のお勉強もできる？」

祖母はとてゝ褒め上手だったから、祖母と話していると、わたしは自分が何でも出来るような気持ちになつた。

祖母は少し首を傾げていたが、やがてわたしの手を取つて、神棚の前に行き、正座をさせた。

「神様へのご挨拶を教えよう。さつきかすみと言つた、神様ありがとう、という気持ちを持つて座ること。いいね」

祖母はわたしの隣で膝を揃えて座つた。

「神様の前でご挨拶する時は、必ずきちんと背筋を伸ばして正座して。太ももの上の手は、五本の指を真つ直ぐに伸ばして」

祖母はわたしの背骨に触れ、指の形も直してくれた。

「お辞儀する時は、その手を自然に太ももの外側に滑らせるようにして。頭を下げる時は、両手の親指と人差し指をくつつけて三角作つて、その中に顔を入れるつもりで……さあ、やつてごらん」

そうそう上手だね、ありがとうが伝わつてくる、神様もお喜びだよと、祖母の指導は褒め言葉に終始した。

「二礼二拍手といつてね、二回お辞儀して二回手を叩く。

一度目のお辞儀は神様に捧げるもの、二度目のは自分を神様に差し出すつもりで。手を叩く時は右手の指を一節下げる。これは神様を敬う気持ちを現しているんだよ。そして、一つ目の拍手は神様が来てくれる道を浄めるため、二つ目の拍手は自分を浄めるため。神様が教えてくださったんだよ。今はまだ意味が分からなくてもいいからね、さあやつてごらん」

そんなふうにして、意味も分からぬまま、一つ、また一

つと、祖母に教えてもらった。自分の身を浄めるために必要な禊の作法やら、目を閉じたまろうそくの明かりを目の間に見ること、全ての人の体の中に宿っているという神の分光を自分の体の中に見ること、それを輝かせること、などなど。それらは、しかし、実際の生活で生かされることはなかったで、今ではほとんど忘れてしまった。

それに比べ、祖母に教えてもらった料理はきちんと身に付いた。植物には大きな力があると祖母は教えてくれた。食べて栄養になるだけでなく、調理をする過程でも、特に季節の野菜などは触れているだけで、手から気を頂く事ができる、だから料理は神聖で重要と言うのだった。

わたしが最初に祖母から習ったのは、祖母がその母から教えてもらったという五平餅だった。もち米を混ぜて炊いたほかほかのご飯を漬すのがわたしの役目だった。

「おいしくなりますように、おいしくなりますようにって、この棒にお願いしながらやってごらん」

祖母はそう言つて、すりこ木を両手に握らせてくれた。いぼいぼがいっぱい付いた、長くて太い棒だった。

「これはおぼあちゃんがお嫁に来る時に持ってきたの。山椒の木といつてね、葉にもなるし食べてもおいしい。有難い木なんだよ」

途中から祖母が代わつて手際よく漬した米を、ダンゴに

丸めて平たく潰した。それを串に刺して、胡桃のたれを刷毛でつけながら庭に置いたコンロの炭で焼く。

「おいしくなりますように、つて炭火にお願いして焼くんだよね」

祖母を見上げると、

「ながーい間、森の栄養をいっぱい吸いながらお日様と雨で育った木が、焼かれて炭になってこうして美味しさをくれるんだよ」

祖母は、いとおしそうに炭火を見つめた。

「火の力は人の体の中にもあるそうだよ。ほら、かすみの手はこんなにあつたかい」と、祖母はわたしの手を握る。

「これだつて火の力があるから、体の中が暖かいから、胃も食べ物消化してくれる。だからいっぱい食べられる」

香ばしい香りと煙の匂いに、祖母は目を細めるのだった。

4

そんな祖母との関係も、思春期が近づくとつれて変化していった。

中学生になって初めて、祖母の家を訪れた時だった。話したい事はたくさんあった。一回目の定期試験の成績が良かったこと、バスケット部に入部したこと、新しく出来た

友達のこと、親しくしてもらっている先輩のこと。そんな事々を夢中で喋った。

「仲のいい友達がいるんだね」

一区切りついた時、それまでにこにこと頷きながら聞いていた祖母が、ぼつんと言った。

「誰のこと？ サエちゃん？」

「そうじゃなくて、家が近所だつて言つてた」

「ああ、それはミック」

「そう、その子だった」

答えて祖母は目を閉じた。とたんに空気が変わった。ずしんと重いものが肩に被さってくるのを感じた。ややあつて、祖母は言つた。

「その子には気をつけなさい。かすみにとつてはあまりよい相手じゃない。少し離れていたほうがいい」

目を開けると、わかつたね、というように、祖母は微笑んだ。

父親の都合で転勤が多く、小学校入学以来わたしはもう三回学校を変つていた。今の住まいに越してきた時、近所と同じクラスのミックがいて、色々と親切にしてくれたから、学校生活にもすぐ慣れることが出来た。中学に進んでからクラスは違つたが、同じバスケット部に入つて毎日一緒に登下校している。

わたしにとって、友達はとても大切だった。数年ごとに新しい学校に移つて、人間関係を一からやり直さなければならぬ環境にあつたから、人の助けはどうしても必要だった。友達に好かれることが自分を守ることであつたら、いつもどこか緊張していて、自分から好きになれる友達は稀だった。そんな中、ミックはわたしが心の内をさらけ出せる、数少ない大事な友達だった。祖母にだつて、どうこう言われたくはなかつた。わたしは初めて祖母に対して反発を覚えた。

「転ばぬ先の杖、ということわざがあるように、前もつて心積もりをしておけば、転ばなくて済むということがあるから」

わたしの心の中を見抜いたように、祖母はさりげなく付け加えた。

これがいやなんだと、咄嗟にわたしは思った。わたしは祖母が好き。だけどそれと同じくらい、本当は祖母が嫌いだ。本当はずつと祖母が怖かつた。祖母を好きなのと同じくらいに怖かつた。祖母はいつもわたしの心の中を見抜いてしまう。だから祖母の前では良い子でなければならぬと、時に構えて接していたことを、この時はつきりと自覚した。

それ以来、わたしは祖母と距離を置くようになった。少

し離れてみると、祖母という人の特殊性が改めて見えてきた。

世間には、神という言葉自体に拒否反応を示す人は多く、その上、信仰心というものも迷信や無教養などと同義語に扱う人がいる。年齢を重ねていく中で出会うそれら多くの人達に、あああの家の孫娘かと、そんな目で見られるのがいやだった。自分の本質とは遠いところで評価を下される、それも胡散臭いといった類いのレッテルなのだ。煩わしくて重かった。

しかし一方で、そんな世間の人達よりも、祖母こそが尊敬に値するという、嘘偽りのない本心もあった。自分の身を犠牲にして人のためにつくしている祖母のありようは、理屈ぬきで立派だと思う。にもかかわらず、父が祖母を避ける気持ち、わたしにはしだいに理解できるようになってきていた。

父の転勤を理由に、小学校からは祖母と離れた土地で暮らすようになったのも、実は両親のこういう配慮があったと後に分かった。離れて暮らしていても、盆暮れと最低でも年に二度は祖母の家に帰っていた。小学生の頃は指折り数えていたその日が、年齢とともに煩わしくなり、帰っても母屋にこもって離れにはほとんど顔を出さない、という状態が続いた。

父と母は、最初から距離を置いていた。孫のわたしが近づくのをあえて止めることはなかったが、出来れば祖母と関わりたくないという雰囲気があった。祖母が神がかりになった時、もう成人していた父は、シャーマンとしての祖母を自分の中で切り捨てているように見えた。父は祖母に對し、自分を産んで育ててくれた母親という、ただそれだけで接していた。強いてそうしているようにも見えた。母は父よりも、もつと距離を置いていた。母が離れに入るのは本当にまれだった。母は決して祖母を嫌っていたわけではないと思う。ただ、理解できない世界にはあまり近づきたくない、できれば関わりたくないという思いは、常に母から感じ取れた。

年を重ねるにつれ、わたしもこうした父母の側に身を置くようになったのだった。

結果的にいえば、祖母に言われたとおり、わたしはミクに裏切られた。彼女によつて、人には表の顔と裏の顔があることを知らされた。後から思えば、ミクにはいつも周囲の迷惑を必要以上に気にして、苛立っているようなところがあった。物事を皮肉に曲げて見る癖があつて、しばしば他人に厳しかった。

ミクの母親は厳格な人だった。そして子供を学業成績で

評価する人だった。後に知ったのだが、わたしはミクよりも成績が上というところで、母親のおめがねに適つたらしい。自分の子供によい影響を与えてくれると、期待されたのだろうか。ミクがわたしに親切だったのは、実は母親の助言が影響していて、彼女の本意ではなかった。もしかすると彼女は最初から、わたしを好きでなかったのかもしれない。事件が起きたのは、中学一年の夏休みも僅かになった八月の終わりだった。夕方になって、学校から呼び出しがあった。

「教頭先生からよ。保護者の方とご一緒にすぐに来ていただけませんか。ミクちゃんのことらしいんだけど。何かあったのかしら」

母に急かされて、訳が分からないまま学校に行き、事務室に案内された。生徒指導の教師と教頭がいて、向かいにミクとその母親が既に座っていた。ミクは、泣き腫らした目をしていた。隣にわたしと母が並んで座ると、

「みなさん揃いになられたので、わたくしから説明をさせて頂きます」

すぐに教頭が口を開いた。

「実は本日、ミクさんが駅前の本屋で料金を払わずに店を出てしまい、それでまあ、学校に連絡が入ったわけです」

万引きじゃん。わたしは驚いて隣のミクを見た。彼女は

青ざめた顔で、膝の上に視線を落としたまま動かない。

「かすみさん、知ってましたか？」

教頭がわたしの目を覗き込んだ。

「え……はい、今、ききましたけど」

いきなりの言葉に面食らった。教頭は問いたですように、「ほんとに、知らなかったんですか」

重ねて言った。

「ミク、ほんとに？」

訳が分からないまま、わたしはミクの顔を覗き込んだ。

けれども彼女は顔を上げず、俯いたままだった。

「ミクさんは、かすみさんに頼まれたと言ってます」

生徒指導の教師は言い、

「ミクさん、さっきの話で間違いありませんよ」

ミクに声をかけた。彼女は微かに頷いた。

わたしのせいかな？ 知らないよ、なんだこれは、何が起きてるんだ、何でこんなことに。自分の心臓がどくんどくと音を立てるのが分かった。

「ミクさんからはそう聞いてますが、今度はかすみさんからもお話していただきたいと」

教師の目はわたしを責めていた。

「かすみさん、ほんとのこと言っちゃうだいいよ」

ミクの母親が押し殺した声を出した。

わたしは眩暈がした。わけがわからず混乱した。こんなことがあっていいのか。突然背中を蹴られて真つ暗な洞窟に放り込まれ、鍵を掛けられてしまったような恐怖と孤独を感じた。

「かすみ、どうなの？」

母が小声で囁いた。わたし以上に混乱して、おろおろしていた。

「ミック、どういうこと」

残っている勇気をかき集めて、もう一度わたしはミクの顔を覗き込んだ。それでもミックは俯いたままだった。

「どうということなのか、こちらが聞きたいんですよ」ミックの母親がヒステリックな声を上げた。「かすみさん、ミックは強く出られたらイヤと言えない子なのよ。この子に何を言ったのか、ここで隠さずに言っってください」

わたしは声が出なかった。周囲の音が遠のいていく中で、祖母の声だけが聞こえた。

その子には気をつけなさい。

転ばぬ先の杖……。

転勤族の子供というのは、こんな時ありがたい。しばらく辛抱すれば、リセットボタンが押せるのだ。目を閉じてしまえば、やがて周囲の景色が変わってくる。翌年、わたしは振り返ることなく引越してトラックに乗って、また別

の地に移り住んだ。

祖母との距離が最も遠くなったのは、大学進学が決まり、報告がてら挨拶に行った時だった。

「よく来たね」

祖母は変わらぬ笑顔を見せて、

「神様にご挨拶しておいで。お待ちになっておられるよ」いつものように言った。

祖母の家に入ると、わたしは必ず教えられたとおり神棚の前に座り、二礼二拍手して手を合わせる。けれどもこの時、どうしてだろう。突然、怒りに似た衝動がふつと立ち上がってきたのだった。

「今日はおばあちゃんにだけ挨拶に来たんだから、神様はいい。自分のことは自分で決めてきたから、これからもそうするから、神様はもういらない」

わたしの硬い表情に祖母は少し驚いたようだったが、すぐに、

「それならそれでいいよ。おめでとう。よく頑張って勉強したね。今日はゆつくりしておいで」

いつもの優しきで言った。

「ううん、今日はちよつと忙しいから、またくる」わたしはもう腰を上げていた。

「あら、かすみさん、もうお帰りですか。今日はおばあ様が朝からおやきを焼いてくださったんですよ。かすみさんがお好きな野沢菜のおやきですよ。せつかくなので持つていつてくださいな」

ヨシさんはあわてて台所に走つて、包みを持たせてくれた。発泡スチロールの箱に入れておいたのか、まだ暖かくて、ほんのりごま油と野沢菜の匂いがした。

おやきも祖母に教わりながらよく一緒に焼いたものだったが、これは特にわたしの好物だった。酸っぱくなつた野沢菜の塩気を抜き、細かく刻んでからごま油と少々鷹のつめで、甘辛く味付ける。地粉の生地を手のひらに薄くのばして具を詰め込む作業は、何度やつてもうまうまはいかなくかつた。祖母が作るおやきは皮が均等に薄く、具もたつぷり入っている。わたしのはどうしても部分的に皮が厚くなつたり、反対に薄すぎて破れ、具がはみ出してしまふ。祖母の手のひらで魔法のように伸びる皮は、真似の出来るものではなかつた。

「きれいにのびて包んでくださいと、皮をお願いすればいいんだよね？」

祖母の口癖を真似るが、わたしの願いはいつも皮まで届かなかつた。

「そうそう、それは一番大事だね」祖母は声を立てて笑つ

た。「その次に大事なのは慣れること。何度も繰り返して作つていけば、手が覚えてくれるんだよ」

手をべとべとにしながら、祖母と二人で何度おやきを焼いたことか。今日、祖母はきつとわたしが喜んで食べる顔を見たくて作つてくれたのだろう。そう思うと、無性に悲しくなつた。持つて行き場のない怒りもあつて泣きそうになつたわたしは、あわてて部屋を出た。

わたしは決して、祖母が身をおいている神ごとの世界を否定していたわけではなかつた。祖母は選ばれた人なのだと自分なりに思い、神ごとの向かう姿勢に尊敬もしていたけれどもそれは祖母と神との関係で、わたしにとつては遠い話だつた。神はおられるだろうが、とても遠くてわたしのことはご存知ないだろうと、そんな投げやりな漠然とした心境の中にいた。

「じゃ、またおいで」

振り返つたわたしに、祖母は入学祝いにと封筒を差し出した。

「もういらなから」

それすらも、わたしは拒絶した。

祖母は相談者が置いていく謝礼を、全て神棚にあげて自分からは一切手をつけなかつた。お金をお金として受け取るのは、神ごとの世界においてしてはならないことと言つ

ていた。神様から、受け取ってよし、とお言葉があった後に初めて、感謝の心があるものだけを謝礼として受け取り、その他は、ヨシさんが児童養護施設などに寄付をしていた。そういう事情を知っているから、よけいに祖母からお金を貰いたくなかった。貰ってはいけないと、頑なになっていた。

「いつでもいいから、またおいで」

祖母は差し出した手を下ろして、寂しそうな顔の上に笑顔を作った。

5

そんな距離がまた少しずつ縮まっていったのは、わたしが社会人になって、将来を約束する男性が現れてからだ。友達の結婚式で知り合っただけで親密になり、互いに結婚を口にするようになった。そうなるまで半年ほどしか経っていなかった。

わたしは大学を出て、会計事務所で働き始めたばかりだった。在学中に税理士資格に必要な科目を一教科取っていて、残りはその場で働きながら勉強を続けていくつもりでいた。しかし、実際に働き出してみると、狭い事務所で一日中数字と向かい合っている生活には、予想外の疲れがあった。

た。更に、夜には資格試験のための勉強という睡眠時間を削る生活が、それに拍車をかけた。記憶力の衰えや体力の限界も感じる厳しい現実の中で、試験に合格していく自信は、日々薄らいでいった。

わたしは自分が専門職につく人間だと信じていた。これまで受験に失敗した事がなく、ある程度努力すれば自分はそのところまでいけると思っていた。だからこそ選んだ進路だったから、わたしは初めての挫折感を味わっていた。彼はそんな時に出会った相手だった。

結婚すれば、こんな生活から逃れられる。挫折したのではなく家庭を選択したのだと、自分にも他人にも言い訳ができる。そんな思いがあるのを、自分でよく承知していた。相手を好きなのか、自分の人生を楽な方向に転換したいのか、多分その両方だろう。所詮わたしなんてこんなものさという思いと、ほんとにこれでいいのだろうかという思いの間で日々揺れていると、無性に祖母に会いたくなってきた。

おばあちゃんに会いに行こう。

わたしは腹を決めた。自分のことは自分で決めると言いながら、結局は祖母に助けを求めたのだった。

祖母の一日は神ごとに始まって神ごとに終わる。朝は真冬でも井戸の水の禊で始まり、神棚の前に座って祝詞を奏

上した後で、簡単な朝食を済ませる。日曜日以外は、十時から昼食をはさんで午後三時まで、神棚の前で訪問者に神の声を伝える。その後、日が短い時期には六時、夏場は七時の夕食までが祖母に許された個人的な時間だった。夜は日によってまちまちだが、最近はずっと手紙で相談事を依頼してくる人も多く、順番に返事を書き送っているらしかった。

そんな多忙な日々を送る祖母の空き時間を待って玄関に立つと、すぐにヨシさんが顔を出した。

「まあ、かすみちゃんだったのね、お久しぶり。綺麗になつちやつて、誰かわからなかつたわ」

ヨシさんは目を丸くした。

「おばあちゃんいる？」

「ええ、いらつしゃいますよ、お待ちですよ」

「あたしが来るの分かつた？」

「夕方にお客様がいらつしやるから、すぐ居間にお通ししてと、それだけお聞きしました」

祖母は居間の縁側にいた。広げた新聞紙の上に山盛りの小豆があつて、祖母は老眼鏡をかけて豆をより分けていた。

「よく来たねえ」

祖母は満面の笑みを浮かべた。

「おばあちゃん何してんの？」

ここ何年かの無沙汰を詫びることも忘れて、祖母との間

に作っていた距離を、わたしは咄嗟に飛び越えていた。

「今日来た人がね、こんなにいっぱい小豆を持ってきてくださったんだよ。かすみはいつまでいる？ 明日までいられるならお萩でも作ろうかね」

「明日の朝には帰らないと」

「それじゃ、朝に食べられるようにしておこう」

祖母はより分けた小豆をザルに移して、老眼鏡を外した。わたしは大の甘党で、なかでも餡子は大好物だった。ぼたんの花が咲く春はぼたもちで、萩の花の秋はおはぎ。夏は夜船で冬は北窓。季節ごとに名前がついているから、同じものでも食べるたびに何だか得をした気分になるねえ、などと言い合いながら食べたものだった。もしかすると祖母は、久しぶりに一緒に台所に立とうと、わたしを誘っているのかもしれない。

忙しい神ごとの合間をぬって、祖母は今でもよく料理をしていた。相変わらず、野菜に触れていると元気になる、野菜が元気をくれると言った。日常の食事はヨシさんが作ってくれるが、季節ごとの野菜を使った漬物やら煮物はよくして、訪れた人のお茶請けなどに出されているとのことだった。

祖母は両手を払って立ち上がると、洗面所で身支度を整えて、

「さあ、ご挨拶にいかがかね」

昨日の続きのように、わたしを促した。わたしは領いて、祖母の後に続いた。一緒に暮らしていた、子供の頃に戻った気がした。前を歩く祖母からは、懐かしい香の匂いが漂っていた。

神棚の太い蝋燭には既に火が灯されていた。祖母はわたしを待っていたのだ。並んで神棚に向かって正座し、両手を太ももの上にのせて背筋を伸ばすと、

「はい」

合図の声があつて、祖母に合わせて二礼二拍手をした。

祖母は隣に座ったまま、身じろぎもなかった。そつと伺うと、目を閉じた横顔が見知らぬ人のように見え、あわてて前に向き直った。やがて、祖母がふーつと長く息を吐いたかと思うと、

「何かお聞きしたい事はありますか」

目をつぶったまま、口を開いた。

それはわたしの知っている祖母の声ではなかった。いくぶん高く、柔らかく、鼓膜を震わせて体の中に響いてくるようだった。それは日常の中では決して聞くことの出来ない、わたしが初めてまじかで聞く、神の使い人の声だった。

「はい。いま、結婚を約束した人がいます。ここまでがとても速くて、流されているような気がします。本当に彼と

結婚してもいいのかと、迷っています」

シャーマンの祖母に、すんなりと自分の気持ちを差し出すことが出来た。わたしは、祖母の向こう側にいる人智を超えた存在と向かい合っていた。

「仕事のことはずいぶん気に掛かっていますね」

ややあつて、祖母は口を開いた。

「はい、資格試験を受けていくことが負担になってきて、自分には無理かもしれないと思つていて、それで結婚を逃げ場にしていないのではないかと」

「逃げ場ではありません。確かにその仕事はあなたには合つていないようです。他の道のほうがよいです」

「そうですか…、よかつた…」

「自分をだめな人間だと思わぬように」

「はい」

「相手は、少し年上の人ですね」

「はい、五歳年上です」

「あなたは今、戸惑いや不安の中におられる。けれども、相手は物事の道理をわきまえた大人なので、そのまま進めて大丈夫です。不安に思わず進みなさい」

「その人とこのまま進んで、結婚してもいいんでしょうか」

「はい。そうなります」

声はきつぱりとしていた。大丈夫です、とか、いいですよ、ではなくて、そうなります、というのが意外だった。

「他に聞きたいことはありますか」

声が続いた。

「そうなります、ということとは、彼との結婚は決まっていたのでしょうか」

「はい。あなたの場合は、決まっています。その流れのままにいくとよろしいでしょう」

「はい、わかりました」

「それから、このよい動きは、あなたの、たぶん母方の家系の、片腕のない兵隊さんがご援助くださっていますので、家に帰られたらろうそくに火を灯してお礼を申し上げます、ください」

「わかりました。ありがとうございます」

深く頭を下げると、

「神はいつも、あなたの手足よりも近くにいます。そのことをあなたが理解すればするほど、神の力は大きく働くようになります。それをよく心にとめて、日々を過ごしてください」

声は答えて、また、ふーっと大きく息を吐いた。

少しの間があつて、祖母が神棚に一礼したので、私も真似てお辞儀をした。

それからしばらく、祖母は神棚に手を合わせていた。口中で唱え言葉のようなものを小さく呟いていたが、やがてもう一度深々と一礼をした。

全てが終わると、祖母は体ごところらを向いて、わたしの目をしっかりと見つめた。

「かすみちゃん、おめでとう」

普段の祖母に戻っていた。

「色んなことがあるだろうけど、その人と一緒にさせていたことに感謝して過ごす事で、運気が良くなつていくと思うから。苦しいことがあつたら、それは自分が成長する時と思つて、ここに来て少し座つていきなさいね」

後から思えば、その言葉はとても重要だった。しかしその時のわたしは、神様からも祝福されて運命の人と結婚できると、単純な喜びに浸っていた。

数ヶ月後に、わたしは結婚した。会計事務所をやめて家庭に入り、参考書の類いを全部処分して、ようやくほっとした。

朝食を作つて夫を会社に送り出し、子供が出来るまでのささやかな楽しみと、ヨガや陶芸を習った。夕食を作り夫を待つと一緒にご飯を食べて、片づけをして一日が過ぎた。夫は好き嫌いなく何でも食べてくれたから、祖母から仕込まれた料理の腕前を、十分に発揮することが出来た。一週

間がとて早く過ぎた。ちよつと退屈だけれど、自分の人生はこんなふうにならずと続くものと、わたしは思ひ込んでいた。

6

平凡な時は、しかし、短かった。やがてくるだろう妊娠、出産、子育てという多忙な日々の前に、ほんの一時休暇をもらったつもりで過ごしていたのが、妊娠の兆候がみられぬまま一年が過ぎた。夫と相談して二人で病院へ行き、共に検査を受けた。いくつかの検査結果は、全て異常なしだった。

そのまま半年過ぎしたが、生理は毎月毎月きちんと訪れた。それまで特に子供好きというわけでもなかったのが、それを見るたびに、子供が欲しいという気持ちが強くなっていた。

不妊治療のため、病院通いが始まった。同じ境遇にある多くの人たちと同様、屈辱的で忍耐力を必要とされ、金銭的負担も大きい検査や治療に時間を費やした。

子供とは何と愛らしい存在だろう。外出先で赤ちゃんを見ると、吸い寄せられるように目が離せなくなった。自分の子供をこの手で抱いて乳を飲ませておむつを代えて、と

いう生活が夢になった。

その反面、どうして子供が欲しいのか、自分たちの生活はこのまま子供なしでも成り立つのではないだろうか、世の中には子供のいない夫婦がいつぱいいる、一生友達のように二人だけで暮らすのもいいのではないか。そんなことを考え込む日もあった。またある日には、子供は授かるものといわれる、もしかしたら、わたし達夫婦にはそういう恩恵を受けられないことが、あらかじめ決まっているのではないか、と思う。医療に頼つても、最後は人智を超えた存在に授けていただくものだということが、治療を通して体で感じる。最後は神頼みなのだ。

そんな日々を送りながら、しかし、祖母に相談しようとは思わなかった。夫と一緒にすることは、あらかじめ決められたことと教えられただけで十分だった。二人の試練は二人で乗り越えるべきだと、わたしはそう思っていた。そう自分に言い聞かせていた。

しかし実際は、真実を知るのが怖かった。あなたたち夫婦に子は与えられない、と宣告されるかもしれないのだ。そんなふうに自分の心のうちを正直に認められるようになるまで、何年もかかった。その頃から、わたしはやはり祖母に聞いてみようと思ひ始めていた。治療と落胆の日々に、ほとほと疲れたのだった。

ちようどその頃からだった。夫の帰宅時間が遅くなった。役職について付き合が増えたのだらうと、最初のうちはあまり気にとめなかったが、やがて、休日出勤も多くなつていった。二人連れ立つての外出がめつきり減つていたので、今度の土曜は久しぶりに都心のレストランでフレンチでも食べたいと、言い出すつもりでいた夜だった。

「この前テレビでやつてたけど、夫の浮気度チェックの第一項目が、仕事を理由に帰宅時間が遅くなる、なんだつてよ」

本題に入る前に、わたしは軽く冗談を口に出した。とたん、夫の顔色がさつと変わった。

「忙しいんだからしょうがないだろ、疲れて帰つてきてるのに、何だその言い方は」

声を荒げ、読んでいた新聞を投げ捨てるようにして、夫はソファから立ち上がった。

「だいたいお前はいつも自分勝手すぎるぞ。やれ病院だ薬だ、痛いだの疲れただのつて、自分だけがかわいそうなのか。子供がなんだ、出来なきやしょうがないだろ、もうやめろ、そんな無駄なことするのはい」

声を荒げて言い捨て、寝室に入ってしまった。ドアを閉める音が、大きく響いた。

わたしは呆気にとられて、さつきまで夫が座っていたソ

ファの窪みを、しばらく眺めていた。あんな夫を見たのは初めてだった。結婚前も、そして結婚して五年になるが、わたし達は争いごとをしたことがなかった。怒つた夫は見ることがなかった。わたしにとつての夫は、いつも頼れる大人だった。いつまで経つても妊娠の兆候がなく落ち込むわたしを、優しく慰めてくれたり、労つたり、あるいは見守ってくれた最愛のパートナーだった。わたしはただ、子供が欲しいのではなかった。この男の子供が欲しいと思つていたので。

わたしは、夫の怒りがそのまま置き去りにされたような居間で、床の上にべたんと座り込んでいた。激しい動悸で息苦しかった。その高鳴りを、ひとつふたつと意味もなく数えていた。

夫には女性がいる。

わたしは直感的にそう確信した。隣のベッドから手が伸びてくる回数が少なくなっていること。外出時の夫の服装が、これまでとは違って明らかに異性を意識していること。それだけで十分ではないか。どうして疑つてこなかったのだろう。夫は外で女性と会っている。

それからは、自問自答の日々だった。

長い間には、夫婦はお互い秘密を持つもの、これまでのようにわたしを大事にしてくれていれば、少々のことには

目を瞑ろう。いや、少々のこととは何だ。これは少々のことなのか。それより何より、夫はわたしを大事にしてくれているのか。わたしに隠れてどこかの女性と深い関係になっている、これは裏切りだ。いや、しかし、男というものは女とは違う生理に動かされ、違う思考経路を持っている、そんなに窮屈に考えることはないだろう。

いや待て。そもそも夫がわたしと別れてその女性と一緒にになりたいとしたらどうか。それをわたしに言い出しかねているとしたら、いずれにしても、夫に問いただすしかない。彼が家庭を取ると言えば許すのか。一度だけは見過ごしてやろうか。夫が女性を取ると言ったらどうするか。別れるしかない。慰謝料は、買ったばかりのマンションはどうなる。これからのわたしの生活はどうなる。違う違う、それは違う。夫に限ってそんな筈はない。

胸の中にくべつとりと臭い泥が塗られて、繰言のたびに厚くなつていく。夫の帰りが遅い夜、夫がいない休日、いつも妄想に苦しめられた。見知らぬ女性と一緒に過ごす夫が、恋愛時代や新婚時代の情熱的な夫と重なつた。女性と一夜を過ごす夫を想像しはじめると、喉の奥から熱い塊が溢れ出して、今にも飛び出しそうになつた。ようやくのこ

とそれを呑み下しながら、一人の長い夜を過ごすのだつた。気がつくとい日中、わたしは際限のない堂々巡りの中に

いた。暗い思いが淀んで、いやな匂いを放ち始めていた。自分の中から腐つた匂いが放たれて、それを吸い込んでまた入る。繰り返した。それに気づいた時、悪循環を断ち切るため、わたしはようやく夫と向き合う決心をした。

夫はあつさりと言状した。相手は大学時代の恋人だつた。ちよつとした誤解が重なつて、互いの気持ちが拗れて別れてしまつたが、同窓会で久しぶりに会つて、誤解が解けた。もともと嫌いになつて別れたわけではない上に、彼女のほうは離婚して独身に戻つたばかり、寂しい時期だつた。夫は途切れ途切れにそんな話をした。

「かすみのことが嫌いになつたわけじゃない」と、夫は言つた。「お前に悪いことをしていると、いつも思つてた。だから彼女とは早く終わらせなきゃいけないと思つてた。そう思いながら断ち切れない、弱い自分がいやだつた」

夫の素直な言葉に、わたしはほつとしていた。硬い棒を呑み込んでいるような緊張感が、徐々にほぐれていった。夫は本来、真面目な性格だつた。その上、酒はほとんど飲めなかつたので、ストレスを溜め込んでいたのだろう。胃腸の調子が悪くなつて病院通いをしていた。

「もう別れると約束してくれば、忘れるようにする」
「ほんとうに悪かつたと思つてる」

言いたい事はいつばいあったが、それを今、口にすべきではないと思つた。夫は反省しているのだ。

「約束してくれればいい」

「もう彼女とは会わない。約束する」

こんな話し合いが持たれて、いつときは平和に過ごして来たのだったが、しかし、夫は女性との関係を完全に切る事が出来なかつた。それを知つた時、わたしはもう考えるのが面倒になつた。頭の中が空っぽになつた。どうでもいい、どこまでも踏みつけるがいい。四肢の感覚が鈍くなつて、手足の先から身体の芯に向かつて、じわじわと冷気が染み込んできた。

祖母の家に行こう。

そう思う時だけ、少し胸が温かくなつた。わたしにはそこしか行く場所がなかつた。

7

裏口から入つて玄関に廻り、声をかけてから戸を開けた。すぐにヨシさんが小走りで見れて、

「かすみさん、お久しぶりですのにごめんさいね。お入りになる前に、井戸でお浄めしてくるようにと、おばあ様からのご伝言です。ちよつとお待ちくださいいね」

すまなそうに言つと、いったん奥に入つて新しい柄杓を抱えてきた。

「これをお使いくださいとのことですよ」

襦のやり方は、むかし祖母に教えてもらつていた。その時は夏だった。プール感覚で、冷たい井戸水を嬉々として浴びていたような記憶がある。膝下までの白い襦袢のようなものを着て、塩で自分の周囲に丸く結界を作つたまでは覚えていたが、その後はどうだったか。それにしても、今は北風が吹く初冬だ。ウールのコートを着ているこの時期に、吹きさらしの戸外で襦とは。

「襦着は？ 塩はどうするの？」

気を取り直し、とりあえず聞いてみると、

「手足だけでよろしいそうです。井戸場は先ほど浄めておきましたので、塩は必要ありません」ヨシさんは頷いた。

「全身に水を通す意識を持つて、丁寧にしてくださいとのことですよ」

それはよく言つてくれよと、ほつとして心の中で呟いた。桶に水を汲み、真新しい木の柄杓で掬つて手に掛け、靴下を脱いで足に掛ける。井戸の水に冷たさはなく、僅かにとろりとした柔らかみがあつた。

襦は水でするだけとは限らない。祖母に習つたのは水の他、塩の襦、光の襦、風の襦と、確かその四つだった気が

する。洗面器に入れた塩で砂あそび感覚を楽しんだ塩の禊、裏山へ登る道の途中、木々の間から差し込んでいる陽の光を身体に受けた光の禊、頂上に立つて風に吹かれながらの風の禊。その度に、祖母の横で意味も分からず、光に風を手を差し上げたりかざしたり、見よう見まねでやっていた。友達と遊ぶより、祖母の真似をして過ごす時間が好きな子供だった。

一通り手足に水をかけてから、物足りないような気がして、あの頃のように目をつむってみた。右手に柄杓を持ち直し、左手に水を掛ける。その時に、頭のてつぺんから体の真ん中を水が通り抜けていく感覚を呼び寄せる。両手を通す意識を持っていくと、やがて体内に水の通り道が出来た。

体には前も後ろもあるんだよ。

むかし、祖母に言われた言葉を思い出す。手と足と交互に水を掛け続けながら、体全部に水を浴びるイメージを作ってみる。頭から胸、腹、背中、手、足と、全体に水が降りかかる意識を持つと、水のしぶきが目の裏にありありと見えてきた。

「もうよろしいかと思えます」気がつくくと、ヨシさんがタオルを持って後ろに立っていた。「おばあ様はかすみさん

が来られるのを、朝から楽しみに待っておられましたよ」

タオルを受け取って手足を拭っていると、胸の真ん中にできた水の通り道が、すつと透明に光ったような清涼感を覚えた。

「なんか食べたくなっちゃった」

急に空腹を覚える。ずいぶん長い間、まともな食べ物をお口にしない気がした。

「ええ、今日はわたしがかすみさんのお好きなお好み汁を、針しようがたくさん入れて作らせていただきました」

「お腹すいたなあ」

ヨシさんの作るつみれ汁は、あつさりしていてコクがあり、いくらでも食べられる。

「はい、神様にご挨拶していただいてから」

「おばあちゃんもそこに？」

「ええ、整えられてお待ちです。お聞きしたい事がありましたら、ご挨拶の後でお伺いしてくださいとのことです」

ヨシさんは一礼してから、台所へ入っていった。

客間に入ると、神棚にお明かりが灯されて、その前に祖母が座っていた。祖母にはもう準備が出来ていると、その背中を見てすぐに分かった。二礼二拍手をして膝に手を置き、

「お願いします」

祖母の背中にお辞儀した。

「お聞きしたい事はなんですか」

シャーマンの声がした。

「はい、夫のことです。別れようかと思っています」

それだけを一気に言つて、ああ自分は別れようと決意してここに来たのだと、改めて思う。

「それは結婚の時に言つたはずですよ」

「はい？」

「ご主人と添い遂げることは決まっていますよ、と」

「はい、でも……」

「あなたは最後まで、ご主人と一緒に暮らすことになりません」

「別れるなということですか」

「今は苦しいでしょうが、添い遂げることを神様は望んでおられます」

「離婚はいけないことでしょうか」

「あなたの場合は避けたほうがよろしいですよ」

「この先ずっと、こんな状態で過ごさなければならぬのではありませんか」

「こんな状態ではありませんよ、良くなります」

「本当に良い状態になるのでしょうか」

「神はいつも人々の幸せを望んでおられます。何の心配も

ありません。神の思いをいつも感じて、心身のバランスを整えて過ごしてください。その為、井戸のそばにある石を一つ拾いなさい。白い布に包んで、いつも身近に置くように。苦しい時にはそれを苦しい場所に当てて、神様の光がありますようにと祈りなさい」

祖母の声は鳩尾にすつと染み込んで、暖かな流れとなつて全身を巡つた。

「いつも喉の下や胸が苦しかったですよ」

感情が素直に言葉になった。涙が零れてきた。

「神はあなたの過去も現在も未来も全てご存知です。神の光はいつでも降りかかっています。あなたは心を開いてそれを受け取ればいいのです。神の光を受け取りなさい。そして、後ろを振り向かず、前に進みなさい」

「どうすれば光を受け取れますか」

「一日一度、目を閉じて心静かに座る時間を作りなさい。

その際、吸う息と吐く息に意識を集中すると座りやすいです。身体のだこにもとらわれない楽な姿勢で、五分ほどでいいですよ」

「やってみます。石は、どんなのを拾えばいいんでしょうか」

「あなたがこれと思う石です。白く光って見えるはずですよ。石を賜りますと、井戸の神様にお伝えしてから拾ってください

さい。」

「わかりました」

「それから、夫はあなたに対して罪悪感を持っています。あまり責めないように。あなたに対して愛情がなくなつたわけではないんです。そのことを分かかってあげてください」

有難うございました、と祖母の背中に一礼すると、

「心の目を開けなさい。今、この時を自分のものとして、精一杯生きなさい。必ず道は開けます」

それからしばらくの沈黙の後、祖母はふーつと深く息を吐いた。背中から力が抜けていく様子がよく見て取れた。

神の声を聞く場所から、祖母が降りてくる。

ややあつて後ろを振り返り、祖母はわたしを見て微笑んだ。

居間には食事の準備がされていた。

「おなか空いたね。さあ、食べよう」

祖母は食べ物を前にすると、とても幸せそうな顔になる。祖母自身は体が小さいので、それほど食べるわけではない。喜んで食べている人を見るのが好きなのだ。

「サバ寿司だね、久しぶりだわ」

小さな寿司桶から、甘酸っぱい匂いが部屋中に広がって

いた。

「かすみにはこのところ、ずつと食べさせてなかったね」

「うん、サバ食べたかったよ」

わたしは昔から紅しようがが好きだった。だから祖母が作る椎茸入りのサバ寿司には、黄色の錦糸玉子の上に紅しようがの千切りがいつぱい散っていた。その彩りを見るだけでわくわくしてくる。

むかし、錦糸卵を焼くのはわたしの役目だった。祖母の台所にはよく使い込んだ鉄のフライパンがあつて、いつもうつすらと油を吸い込んで、黒く光っていた。この上に溶いた卵を薄く伸ばして、周囲にうつすら焦げ目の色が見えた頃、火を止めてお皿の上に取り出すと、祖母はいつも褒めてくれた。

「かすみに焼いてもらった卵は幸せだね。こんなに薄くて綺麗に丸くなつてる」

まな板の上で時間をかけて切るのだが、わたしが作る錦糸卵はどうしても太さがまばらになってしまう。満足のいく切り方が出来たためしはなかった。けれども祖母は、

「かすみの錦糸卵は、一本ずつが個性的だからいつぱい楽しめるね」

そう言つて目を細めるのだつた。

そんな思い出話を語り合いながらの、祖母と一緒の食事

は何年ぶりだろう。

「お婆あ様も、かすみさんと一緒だと食が進みますね」

つみれ汁のお代わりをわたしに差し出しながら、ヨシさんも楽しそうだ。

「かすみは料理をおいしくさせる天才だからね」

祖母は箸を持ったまま、嬉しそうに笑った。

食事が済んでから、わたしは井戸に出て手を合わせた。

目を瞑って、石を賜りますと心の中で祈ると、子供の頃、目を病むたびにこうしてここで手を合わせ、祖母の祝詞を聞いていたことを思い出した。祝詞奏上の間は、頭を下げていつも足元を見ていた。そんな頃から知っている石が、必ずある筈と思えてきた。

目を開くと同時に、右の足元あたりが光って見えた。そこにあつた楕円形の白くて小さな石が、目に留まった。拾い上げて井戸の水で洗った。ちょうど手のひらに納まって、握るとぴつたりと手に添う。鳩尾に当てると、ぼんやりとした温かみが伝わってきた。

8

家に帰り、一週間考えた。そして自分に三つの取り決めをした。一つ目は今しばらく夫との生活を続ける事、二つ

目に中断していた不妊治療を完全にやめること、そして三つ目は職に就くこと。それが自分にとつて前進になるかは分からないが、とにかく動こうと思った。幸い、隣町求人広告を出していた会計事務所があつて、すぐに勤め出すことが出来た。

頂いてきた石は、白い布に包んでバッグに入れていつも持ち歩いた。とても苦しい時は喉元に当てた。すると石は、そこに宿つた過剰な熱を吸い取ってくれた。少し苦しい時は鳩尾に当てた。そこに温かい光が入るような気がした。時おり布から出して、閉じた両目の上に交互に押し当ててみた。ひんやりとした石の感覚が、疲れた目を癒してくれた。

夫は休日に出かけることはなくなったが、週に二度ほど帰りが遅くなった。きつと彼女と一緒なのだろう。近頃ははわたしと視線を合わせることすら避けている。最近よく眠れないからと言いつつ、寝室を別にした。それはしかし、あながち嘘ではなかった。夫には、明け方まで眠れなかったと赤い目をして寝室から出てくる朝が、しばしばあつた。夫はまた、よく頭痛を訴えるようになった。精密検査も受けたが、異常なしだった。処方された薬が効かないと訪れた別の病院で心療内科に回されて、すぐにうつ病と診断された。その頃にはめまいも加わって、会社への遅刻

や欠勤が多くなっていた。

休職し、自宅療養と決まった。その前後に、女性との関係はようやく切れたようだった。

はじめの一ヶ月ほどは食事を嫌って、薬を飲んで寝室にこもって寝てばかりいた。常に胃が重いと言い、話しかけても短い返事が返ってくるだけだった。そんな時期が過ぎると、自虐的な独り言を呟いたり、わたしを責める言葉を投げつけるようになった。

「罰があたったな」

食事時、ふいに箸を置いて夫は暗い顔で呟くのだった。

「何でこんなになつたんだ。毒か。そうだ、これは毒だ。毒を流しこまれたような気がする。いつからだ。それは分からん。どこからだ。それは分かっている。俺からだ。毒は俺が持ってたものだ。俺の中から出てきた。これが自業自得ってやつだな。それにしても、何でこんなになつたんだ」

そんな言葉が際限なく続く。

「もういいから、少し食べた方がいいよ」

わたしが言うと、

「心にもないこと言うな。優しい声なんか出すな。ざまみろと思ってるだろ」

顔色を変えて、急に大声で怒り出す。眉間に深い皺を刻

み、わたしを見据える落ち窪んだ目の中には、凶暴な光があつた。

「お前のせいだ、なんで俺と別れなかつたんだ、あの特別にいれば俺はこんなことにはならなかつた。お前が俺を苦しめたんだ、苦しめたんだぞ、分かるか。俺はどんなに苦しかったか。俺を苦しめて楽しいか、嬉しいか」

何の脈絡もなく、急にそんなことを言い出してわたしを責める事もあつた。

夫の持つ苛立ちや憎しみや絶望感、虚無感といったものに取り囲まれて沈み込みそうになる時も、わたしは白い石を取り出して、両手に包んだ。そして、どうか夫にいつも神様からの光がありますようにと祈った。石はわたしの体の真ん中を温かくし、頭に溜まった過剰な熱をどこかに運び去ってくれた。

そんな日に、大学時代に心理学を専攻していたという、会計事務所の先輩が言った。

あなた、それは典型的な共依存よ、昔から女がよく陥っていた落とし穴。わたしがいないと夫はだめになるなんて考えているとしたら、ご主人の病気どころか、あなたの将来もダメにしちゃうわよ。よく考えたほうがいいわ。そしてはやく穴から出てきなさいよ。

わたしは考える事を放棄していた。わたしは夫ではなく、

夫の病氣と向き合っていた。目の前にいて病氣で苦しんでいる人が、自分の夫であると、ただそれだけのことだ。夫を愛しているのかと自分に問うことは、とうにやめていた。その問いはきつと何かを失わせることになる、そんな直感だけがあった。

夫といる時、わたしの頭は空っぽで、ただ身体だけが動いていた。そんな身体にわたしはまた、一つの決め事を課した。それは、何も食べたくないと言いつける夫に、少しでも食べてもらおうということだった。目的を持つと、身体はよく動いた。

いつも無表情か、さもなければ苦痛の表情で、全ての意識を自分の内へと向けていた夫が、最初に変化を見せたのはニラ雑炊がきっかけだった。

小さい頃、風邪をひいた後に必ず母が作ってくれたものだった。母は祖母のように料理が得意な人ではなかった。食に淡泊で、味覚障害があるのだろうか、ただうつつら味がついていれば何でもいい、などと平気で言う人だった。日常の食卓は、時間がかかるわりにはいつも単純な焼き物か煮物ばかりで、たまに揚げ物などがあればご馳走だった。けれども、病み上がりに食べる母の卵入りニラ雑炊の淡白な味は、格別だった。熱が引いた後の身体に染み込むように、手足に力が戻ってきた。それを思い出して、わたし

は夫に作ってみたのだった。

「これなら食べられそうだな」

一口すすって顔を上げた夫の顔に、以前の表情が宿っていた。目に少しの力があつた。夫の力の一端が、わたしの中にも流れ込んでくるのを感じた。

わたしは、夫への料理作りに没頭した。食べているその時だけでも、外に意識を振り向けられるならと思つた。食べる事自体が苦痛だ、面倒だというので、最初は様々なスープを作つた。

コンソメをベースにしたオニオンスープ、卵スープに始まって、具材を少しずつ増やしていった。ポタージュ、中華スープ、和風醬油、味噌仕立てなど。その間、一週間に一度はニラ雑炊を加えた。それを食べる時、夫はいつも同じ顔をした。

例えて言えば、それまでの夫は、忘れ物を捜すことに疲れて諦めている人だった。やがて忘れ物があつたことすら忘れ、探していた時の疲労感の中だけに閉じこもっていたけれども、ニラ雑炊を食べる時、夫は自分に忘れ物があつたことを思い出しているようだった。それが何なのか、探すという意思のようなものも、少しずつ目に宿っていった。

五カ月後、夫は会社に復帰した。午後だけの数時間から

少しずつ時間を増やし、やがてフルタイムで働けるようになった。その早い回復は医師にも驚かれた。

薬を欠かさず飲み続けながら、体調は八分どおり戻ったある夜、食事の片付けをしているわたしの背中に、

「ずっとありがとう。これからは俺が大事にするから」

夫は言った。驚いて振り向くと、もう背を向けていた。

こんなかたちで、夫は自分の精一杯を伝えてくれたのだ。わたしはその時、ご主人と添い遂げることは決まっていますと、祖母の口から伝えられた言葉を、自分の宝としてきたのだと改めて思った。

宝を大事にしてきたから今がある、わたし達はどこから始まる。わたしは心からそう思い、これから先きつと何十年か続くだろう夫との長い人生に、幸福という言葉を当てはめてみたりした。

けれども、人の一生とは何と短い事だろう。夫はそれから四年後に亡くなった。

夫が倒れたと会社から電話が入り、あわてて指定の病院に駆けつけると、彼は意識不明でベッドに寝かされていた。聞くと、会社近くの食堂で昼食を摂った後、散歩してくるからと同僚と別れ、一人公園へ向かったという。夫はうつ病から回復して以来、努めて体を動かすようにしていた。その日も普段どおり、変わった様子は全くなかったという。

通りかかった人の連絡で公園に救急車が着いた時、すでに意識はなかったという。くも膜下出血だったと言われた。彼が倒れていた植え込みのそばにはクチナシの木があつて、その白い花が甘い匂いを放っていた。わたしはそのお香が好きで、夜になるとよく居間で焚いていた。馴染みの香りに包まれて夫が最期を迎えたことは、少しの慰めになった。

9

毎年、目が痒くなる時期になると、抗アレルギー目薬を差しながら、祖母に言われた二つの目のことを思い出す。

体にある目の穢れは井戸の神様が祓ってくださるが、心にある目の方は自分で祓わなければならない、これこそが大事なこと。

口に出して咳いてから、分かっていますよと目薬を点す。

二年前、夫が急死した。その知らせを受けた時も、こうして目薬を点していたなと思っていると、急に祖母に会いたくなつた。

春に電話をした時、セリをたくさん頂いたので冷凍にした、今度来た時おやきにしてあげようと言われたのに、一日伸ばしにしてそれつきりになっていた。思い出すと、セリがいっぱい詰まったおやきがたまらなく食べたくなつた。

祖母が作る具は、少量の油と味噌で和えてあつて口当たりが良いので、食べ出すと止まらない。

さつそく電話を入れると、

「おばあ様は、ちよつと足を痛められて横になつていらつしやるので、おやきはわたしがお作りしておきますが」

ヨシさんの声に元気がない。

「足つて、どうしたの？」

「居間の座布団の端にちよつと足をつつかけて」

「骨とかはなんともないのね？」

「ええ、お医者様も湿布して安静にしていればいいとおつしやつて」

祖母は今年九十歳、さすがに年には勝てないかと思いつつ、軽い捻挫だろうと、わたしは樂觀していた。

しかし、半年ぶりに見る祖母が、あまりに小さくなつていたのでわたしはとても驚いた。もともと小柄な人だったが、ベッドに横たわつている顔がまたひとまわり縮んでいった。

「おばあちゃん、大丈夫？」

声をかけるとすぐに目を開け、祖母は弱々しい笑顔を見せた。

「大丈夫なの？」

祖母は無言で頷くと、わたしに手招きをした。

「遠いと、かすみの顔がよく見えない」

その声は小さく、口元に耳を近づけないと聞き取りずらかつた。ベッドの脇に座つて祖母の手を握ると、

「かすみの目がよくなつた分、今度はおばあちゃんの目がダメになつたよ」

祖母は一氣に年をとつたように見えた。

足を痛めたのは二週間前。最初は安静のため横になつていたのだが、やがて食欲もなくなり、ここ数日は歩けなくなつてしまつたと、ヨシさんが心配そうに話してくれた。

「お医者さんは？」

「往診していただいてますが、捻挫はもう特に問題はないらしいです。ただ、年齢が年齢なのでしばらく安静にと」
「どこか大きい病院で調べてもらつた方がいいんじゃないの？」

「わたしもそう思うのですが、おばあ様がこのままでとおつしやつて」

「お父さんやお母さんは知ってるの？」

「そんなに大ごとにしなくていい、まだ知らせなくていいと……」

「食事は？ 食べられるの？」

「おかゆやゼリーのようなもので」

ヨシさんに支えられながらトイレに立っていたのだが、

今ではそれもかなわなくなっているとのこと。

「祝力はいつから弱くなつてたの？」

「さあ、それは知りませんでした。わたしには何ともおつしやらなかつたので」

わたしは思い立って台所に立ち、ニラ雑炊を作ってみた。

「かすみさんが作つてくださったんですよ」

ヨシさんがスプーンで少しずつ、流し込むようにして口に入れると、祖母は黙つてお椀に半分ほどを食べ、

「もういい」首を横に振つて、「ああおいしかった」

咳のように言つて、疲れたように目を閉じた。

食事の片付けを済ませてから、わたしは祖母の祝詞本を持つて井戸の前に立つた。祝詞をあげる時は、平らな板の上に玉をころころと転がすような気持ちでと、祖母に教えてもらつてある。平らけく、平らけくだよ、と。それを思い出しながら、井戸の神様の祝詞を奏上した。そして祖母の目を癒してくださいと神様をお願いをして、柄杓に水をいただいた。

祖母の寝室に入つて、

「おばあちゃん、目にかけてあげるね」

水に指先を浸して、そつとその目に押し当てた。

「かすみが井戸の神様にお願ひしたからね、きつと治るよ
ね」

閉じた瞼の上を交互に濡らすと、祖母の口元が綻んで、

「ありがとう、ありがとう」

何度も頷いた。

帰り際、また来るからとそつと顔を近づけると、眠つているとばかり思つていた祖母が目を開き、

「水の井戸は潤らさぬように」

わたしを見て、はつきりとした口調で言つた。

祖母はその翌々日に入院して、一ヶ月ほどを病院で過ごした。父と母とヨシさんの三人が交代で、ずつと付き添つていた。

父と祖母は親子だつたんだなど、当たり前なことを思いながら、病院での二人をわたしは新鮮な気持ちで見ている。眠り続ける祖母に話しかけている父の横顔は、時おり小さな子供のように見えた。ほんのたまに目を開ける祖母もまた、父の顔を認める時にだけ、満ち足りて幸せそうな表情を口元に浮かべるのだつた。

祖母が亡くなったのは、二日続きの雨の夜だつた。襖の雨だと思つた。地上を浄めてから昇つて行つたのは、いかにも祖母らしいと思つた。